

加藤 旭（かとう あさひ）の生い立ち



「光のこうしん」を作曲した頃（5歳）

【自然と共に】

1999年10月10日、滋賀県彦根市で生まれ、神奈川県足柄上郡大井町で育つ。大井町は県南西部に位置し、富士山、酒匂川、相模湾、丹沢山系を望む土地。小鳥のさえずり、かえるの大合唱、虫の声など自然の音に恵まれた環境で、幼少期よりその景色や音を楽しむ。



【鼻歌はクラシック】

両親ともに音楽は専門外。まだ入園前の息子が音楽を好きなことに気付いたきっかけは、インスタントコーヒーのおまけについていたクラシック名曲CD。モーツァルトの「ホルン協奏曲第1番」やヴィヴァルディの「四季より『春』」…。当時旭の鼻歌はいつもこのCD収録曲だった。



【ピアノ】

3歳よりピアノを習い始める。気に入った曲は何度も弾き、別の調に転調したり、アレンジしたりすることも。一方で電車や積木、砂遊びも好きな少年。



ピアノを習い始めた頃 (3歳)

【音符から楽譜へ】

ピアノを始めると同時に音符に興味を持ち始める。紙とクレヨンがあれば自分で5本線を引いて音符をお絵描きしていた。五線譜を買ってもらおうと「こんなすごいノートがあったんだ」と、これまでも増して音符を書く。4歳になると音符が曲として成り立ってくる。



3歳の頃の音符



4歳の頃の楽譜

【アレルギーと喘息】

1歳前に食物アレルギーがわかり、卵・乳製品などを除去。おやつは果物や芋類、手作りのもの中心。遠足や運動会など行事の多い秋にはよく喘息が出た。



おやつ作りも楽しい遊び (5歳 クリスマス)



【ヴァイオリンとチェロ】

4歳になるとオーケストラに興味を持ち始め、「ティンパニかヴァイオリンを習いたい」と言い、ヴァイオリンを習い始める。小学3年生時「小田原ジュニア弦楽合奏団」に入団、チェロも弾くようになる。



ヴァイオリンを習い始めた頃（4歳）



チェロを始めた頃（8歳）



小田原ジュニア弦楽合奏団として「ドイツ・マンハイム市 青少年シンフォニーオーケストラ」メンバーのホームステイ受け入れ（9歳）

【こども定期演奏会】

東京交響楽団が毎年サントリーホールで行っている「こども定期演奏会」のテーマ曲に自作品を応募、2006年と2009年に採用される。



2006年採用曲「たのしいようちえん」を弾く（5歳）



2009年採用曲「おもちゃの兵隊」（9歳）

【作曲風景】

「頭の中に流れているメロディーをただ書き留めるだけ。それが楽しくて仕方がない」と本人。たとえば、雨上がり、雑草からしずくがぽたっと落ちたとき。閉めたはずのおもちゃ箱のふたがほんの少し開いていたとき。日常のふとした一瞬がスイッチとなり、彼の中で音楽が流れ始める。書いているうちに楽しくなって、また新しいメロディーが湧いてくる。消しゴムはほとんど使わず、一心に音符を書き続ける。



メロディーが浮かぶと食事も後回し (4歳)



オーケストラ譜を書き始める (6歳)



眠くなってくると音符も休符に (5歳)



「森の中」シリーズ (8歳)



「兄だいのおしゃべり」 (8歳)

【兄と妹】

2歳年下の妹・息吹と。ピアノレッスン、ヴァイオリンレッスン、小田原ジュニア弦楽合奏団と一緒に通う。



「雪のけっしょう」を作曲した頃（5歳）



「はげしい雨」「にじ」を作曲した頃（8歳）



「兄だいのおしゃべり」を作曲した頃（8歳）



「山の春」を作曲した頃（9歳）

【三谷温先生との出会い】

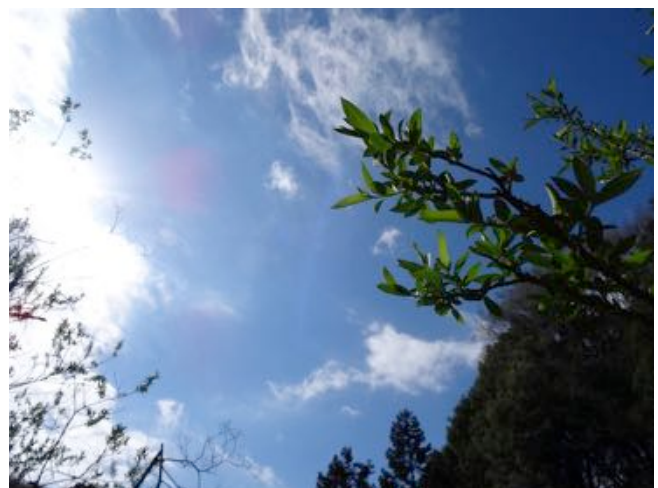
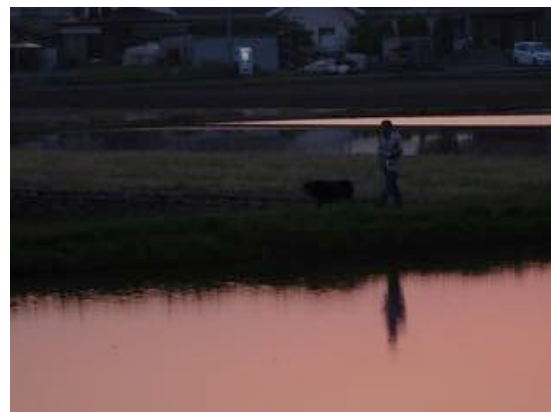
中学入学後、ピアノをより深く学ぶため三谷温先生のレッスンを受け始める。3歳より師事していた小西とも子先生のご紹介。



友人と三谷先生のコンサートへ（13歳・本人右）

【新しい趣味】

中学生になってから夢中になったこと。風景写真撮影と自転車での遠出。



【脳腫瘍】



中2秋 脳腫瘍発症 2回の手術

中3夏 脳腫瘍再発 3回の手術

中3秋 抗がん剤服用

中3冬 てんかん発作

中3冬～高1春 放射線治療

幼い頃よりアレルギーや喘息で病院のお世話になることが多かったため、病院は「治してくれるところ」「楽にしてくれるところ」と心から信頼していた。それでも脳腫瘍手術や長期入院を経験すると、主治医の先生・看護師さんら病院の方の助けだけで乗り切るのは難しく、周りの方々の支えが必要だと実感した。音楽もまた、大きな支えのひとつだった。